慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「智慧院」・東西知的融合の実験場： ヨーロッパの伝統的認識にたいするカイザーリングの懐疑と挑戦
Sub Title	„Die Schule der Weisheit". Begegnungsstätte west-östlicher Geistesimpulse : Hermann von Keyserlings Vision grenzüberschreitender Kulturhorizonte
Author	Knaup, Hans-Joachim
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.33 (2001. 9) ,p.29- 50
JaLC DOI	
Abstract	ヘルマン・カイザーリングの主著『或る哲学者の旅日記(Das Reisetage・buch eines Philosophen)』(1918年)については，拙論『カイザーリングの日本紀行ー西洋認識論の枠組みに映しだされた「大和的なるもの」ーHermann von Keyserlings。Reisetagebuch eines Philosophen“ーBal-tische Reminiszenzen auf einer。Pilgerreise“durch。Yamato“」1)のなかで，構成及び内容にかんして詳細な分析を試みた。本論は，この分析の成果を踏まえた上で，カイザーリングの思想の世界と密接に関連する実践面での活動に焦点をあてて，カイザーリング研究をさらに深化させることを企図している。 上記の論文でも指摘したが，カイザーリングはバルト貴族の末裔2)としてヨーローパ精神史に深い造詣を持ち，優れた語学力を介して当時のヨーロッパの知識層と多彩な人的交流を構築していた。カイザーリングの日本記述は，ヨーロッパ的知性と日本的風土の優れた出会いであり，その多面的且つ多層的な構成と内容の分析には，オリジナル資料に基づく本格的研究を必要とすることは，あらためて指摘するまでもない。 カイザーリングの活動面での足跡を辿り，思想の世界と実践の世界との有機的な連関に入って，こうした連関を構成する要素を抽出しながら再構築を試みるには，さらに一層精密な原資料調査が不可欠である。本論は，これまでの一次資料の調査・研究の成果の過程報告の性格を帯びているが，カイザーリングの実践世界の骨格を提示することを基本的に目指している。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20010930-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「智慧院」・東西知的融合の実験場

― ヨーロッパの伝統的認識にたいする カイザーリングの懐疑と挑戦 ―

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

ヘルマン・カイザーリングの主著『或る哲学者の旅日記（Das Reisetagebuch eines Philosophen)』（1918年）については，拙論『カイザーリングの日本紀行 ― 西洋認識論の枠組みに映しだされた「大和的なるもの」― Hermann von Keyserlings „Reisetagebuch eines Philosophen“ - Baltische Reminiszenzen auf einer „Pilgerreise“ durch „Yamato“』[1] のなかで，構成及び内容にかんして詳細な分析を試みた。本論は，この分析の成果を踏まえた上で，カイザーリングの思想の世界と密接に関連する実践面での活動に焦点をあてて，カイザーリング研究をさらに深化させることを企図している。

上記の論文でも指摘したが，カイザーリングはバルト貴族の末裔[2]としてヨーローパ精神史に深い造詣を持ち，優れた語学力を介して当時のヨーロッパの知識層と多彩な人的交流を構築していた。カイザーリングの日本記述は，ヨーロッパ的知性と日本的風土の優れた出会いであり，その多面的且つ多層的な構成と内容の分析には，オリジナル資料に基づく本格的研究を必要とすることは，あらためて指摘するまでもない。

1）同論文は，『ドイツ語学・文学』（慶應義塾大学日吉紀要）第31号，2000年，S. 50–74に掲載。

2）バルト貴族の末裔という存在とカイザーリングの思想世界との関わりについては上記論文を参照（クナウプ　ハンス・ヨアヒム：A.a.O., S. 55ff.)。

カイザーリングの活動面での足跡を辿り，思想の世界と実践の世界との有機的な連関に入って，こうした連関を構成する要素を抽出しながら再構築を試みるには，さらに一層精密な原資料調査が不可欠である。本論は，これまでの一次資料の調査・研究の成果の過程報告の性格を帯びているが，カイザーリングの実践世界の骨格を提示することを基本的に目指している。

1. 制約なき知恵（Weisheit）と伝播装置の構築

カイザーリングの『或る哲学者の旅日記』は大きな反響を呼び，刊行当時ヨーロッパで多くの読者を獲得した。このことは同時に，カイザーリングの哲学の在り方にも一つの転換点をもたらした。カイザーリングが放浪する哲学者として求めたものは，自分が一定の形に組み込まれることからの脱却であり，空間や時間の制約に捕らわれた状況からの脱出であった。カイザーリングがこうした方向性で求めたものは，内面のレベルだけでなく，実際の生活の場面においても事実として生ずることになった。つまり 1917 年のロシア革命によって，カイザーリング家の土地を含めた全財産は没収され，カイザーリングは故郷を失い，ゼロから新しく始めるような状況に置かれたのである。しかし，カイザーリングの家系はヨーロッパに広く展開しており，その一族の一人としてカイザーリングにはいろいろな選択肢が存在していた。自分が進むべき道を考えていくなかで，カイザーリングはドイツを新しい拠点に選び，ドイツで哲学者として活動することを天命と感ずるようになった。だが，それは大学の講壇哲学者としての道を選ぶことではなかった。むしろカイザーリングの念頭にあったのは，ベストセラーとなった『或る哲学者の旅日記』で得た認識を実践の場面で実現することであった。つまり，世界周遊によって体験し認識したものを新しい方法で表現し，さらにそれらを広める方向にカイザーリングの関心は向かうことになる。

出版業者オットー・ライヒェルに勧められ，また同時にヘッセン大公の援助も受けて，カイザーリングはダルムシュタットに居を定め，1920 年 11 月 23 日，「智慧院 — Schule der Weisheit」を開設した。「智慧院」は教会と

大学という二つの極の中間に位置するものであり，こうした施設を通して，カイザーリングは実践的で社会的な生活の地平に入って行くのである。

しかしこのように具体的な施設を開設したからといって，それは内面において絶えず放浪を続ける哲学者カイザーリングの本質が変容したことにはならない。「智慧院」は通常の意味での学校ではなく，またカイザーリングの理解する「知恵」は一定の方法で教授できるものでもなかった。この「知恵」は，生き生きとした伝播が可能な独自の枠組みを必要とし，そうした枠組みに基づく具体的なインスティトゥートの設立が不可欠であった。

2. 「智慧院」の構成と活動

「智慧院」は次の三つの柱を中核に構成されていた。つまり

1) 時代の様々な声を「共鳴」させるシンポジウム
2) 日常から脱却する具体的な訓練や営み
3) 親密な子弟関係の構築

この三つの要素を組合わせる構想は，これまでのヨーロッパの歴史のなかには見られない画期的試みであった。次に，この三つの構想について具体的に見ていこう。

2-1. シンポジウムと発信メディア

「智慧院」のシンポジウムの場で当時の著名な知識人によって行われた講演は，1919年以後，ヘルマン・カイザーリング編集の智慧院年報『光輝の燭臺（ショクダイ）―世界洞察と生の形成』にすべて掲載された。シンポジウムで発表されなかった寄稿についても，その一部抜粋が年報に収められた。但し，掲載論文はシンポジウムのその都度のテーマと密接に関連するものに限定されていた。

「智慧院」会員相互の通信機関として『完成への道程（Der Weg zur Vollendung - Mitteilungen der Schule der Weisheit)』という叢書も企画された。それは「自由哲學協會（Gesellschaft für Freie Philosophie)」に

よって刊行され，1920年から1946年までのあいだに全体で36巻に及んだ。必ずしも定期的に発行されたわけではなく，必要に応じて当初は一般出版物として販売されたが，1930年からは会員限定で，手書き草稿の形態で継続された。

この叢書は，1920年以後の「智慧院」およびカイザーリング自身の活動を知るうえで最も重要な第一次資料である。全体で36巻の叢書に収められている寄稿は，「智慧院」の協力者によって著されており，テーマの重点も次のような様々な分野に及んでいた —

①「智慧院」のシンポジウムが開催されると，その都度，講演内容を簡潔にまとめた文書や会議報告書が発表された。

②「読書案内」というコーナーが設けられ，それは主にカイザーリングが執筆し，エルヴィン・ルセルが筆を取るケースも時々見られた。このコーナーでは新刊書や，以前に出版されたものでアクチュアリティーを再び獲得した書物が紹介されたが，それは単なる紹介に留まるのではなく，相互に密接に関連付けられ，しかも「智慧院」の任務を十分に考慮しながら記述された。哲学や文学さらに宗教などの分野から生まれる作品を紹介する作業は，「読書を教示する」という目的，つまり「内的展開の促進と同時に‘知恵’を向上させるための方法としての読書を教える」という目的，そうした点を実現する手段であった。この「読書案内」は「智慧院」の活動のなかでも特に重要であった。つまり「読書案内」は，ある特定のテーマに関して様々な作品の存在を指摘し，さらにこうした作品に本質からの解釈・分析を加えることによって，読書への関心を惹起させるという新しい方法を展開したのであった。カイザーリングはこの重要な「読書案内」においても，様々な声を「共鳴」させるこのとできる「オーケストレイション能力」を十分に発揮したのである。

③この叢書は「智慧院活動記録」の機能も果たした。つまりシンポジウムに関する報告が掲載され，ダルムシュタット内外の「智慧院」の活動が紹介

された。さらにカイザーリングによる講演旅行の概要や，外国における「智慧院」の反響，計画中の新刊書やすでに刊行された書物についての内容紹介などが掲載された。

④1930年以降カイザーリングは政治的理由などで著作を発表できなくなったので，叢書『完成への道程』の最後期の巻のなかで，新たに執筆中の作品の一部が紹介されたり，あるいは概要が述べられた。

⑤組織および財政に関する情報や，催し物の日程など事務的連絡も叢書に掲載された。「智慧院」の蔵書状況，特に寄贈によって恒常的に増えていく蔵書状況についての情報も載せられた。

以上のような内容からも明らかなように，叢書『完成への道程』はまず「智慧院」の活動報告書の性格を持っていた。しかし記録を残す機能や広報機能ばかりでなく，特に「読書案内」の構想に端的に見られるように，「智慧院」の目指す「知恵」を深化する一つの方法を具体的に実践する場ともなっている。

ところで「智慧院」の最も重要なメディアは年報『光輝の燭臺（ショクダイ）— 世界洞察と生の形成（Der Leuchter. Weltanschauung und Lebensgestaltung. Jahrbuch der Schule der Weisheit)』であった。この年報は，1919年から27年まで毎年ダルムシュタットのオットー・ライヒェル出版社から刊行され，「智慧院」で行われたシンポジウム及び講演の内容を収めている。『光輝の燭臺』に登場する論者や講演者の顔ぶれをみると，いわゆる「黄金の20年代」におけるヨーロッパ精神界に及ぼした「智慧院」の影響の大きさを測り知ることができる。例えば，C. G. ユングやE. クレチュマーなどの精神分析学者，N. ベルトヤーイェフやM. シェーラーのような哲学者，さらに中国学者R. ヴィルヘルム，インドの詩人R. タゴール，宗教哲学のE. トレルチュなどの重要な知識人が「智慧院」に関わっているのである。

それでは，年報『光輝の燭臺 — 世界洞察と生の形成』の内容を少し見ていくことにしよう。1919年に刊行された年報第1号には，アレクサン

ダー・フォン・グライヒェン＝ルスヴルムによる次のような序文が掲載されている —

1919年智慧院年報『光輝の燭臺 — 世界洞察と生の形成』序文

「現在世界を動かし，特にドイツ人を混乱させているもの，つまりお互いの怒りを煽っては最後はまた人々を近づかせているもの，それは結局のところ「世界洞察と生の形成」の問題である。つまり内面からの再建，土台から新たに立ち上げることが問われている。これまでの依存による魂喪失の状況に代わって，人間としての品位と自由が再度現れねばならない。なるほど表面から見れば，われわれはすでに自由国家に生きているが，しかしわれわれは内面においても自ら律する自由国家のごときものになろうと欲しているのである。人間としての言説をめぐる戦いのなかで言うべき意見を持つ人，そうした人はこの内面の自由国家の場で言葉を発することによって，成熟した民にふさわしい精神の掟の基盤を構築する作業に参与するのである。この年報の構成および内容については，特別な原則や方針があらかじめ立てられているわけではない。この事業に参与する者は，むしろ意見表明の全っき自由を有しているのであり，各人が自分の仕事の学術的内容とその内容のもたらす政治的影響について自ら責任を負うのである。編集を担当した者として私は，論考を寄せて下さった方々および出版社にたいして，その心温まるご好意に篤くお礼を申し上げたい。こうした感謝の気持ちを持って，編者は『光輝の燭臺』を困難な日々の続く状況のなかで希望を求めながら世に送るのである。なぜなら「生を生きる者には希望が消えることはない」からである。

ミュンヘン，1919年1月

アレクサンダー・フォン・グライヒェン＝ルスヴルム」[3)]

---

3) Alexander von Gleichen-Russwurm, »Vorwort des Herausgebers«, in: Der Leuchter, [Bd.1], Darmstadt 1919.

グライヒェン＝ルスヴルム（1865-1947）は作家，哲学者，翻訳者として著名な人物であり，『光輝の燭臺』刊行の際の序文を著していることから察せられるように，智慧院のなかで枢要な地位を占めていた。ルスヴルムの著作活動は広範囲に渡り，小説，戯曲の執筆から，ギリシャ・ローマの古典の翻訳，さらにシラー全集の刊行やゲーテやフンボルトの書簡アンソロジーの作成に及んでいる。ヨーロッパ文化史に関する優れた著作や哲学書も多く著している。ルスヴルムが序文で明確に宣言しているように，『光輝の燭臺 ― 世界洞察と生の形成』は「内面の自由国家の場」を構築するために企画されたのである。「人間としての言説」を求める人々がこの雑誌に集い，「魂喪失」の時代状況のなかで「内面からの再建」の事業に自らの「責任」で参加することが求められた。

それでは，智慧院年報『光輝の燭臺』には実際にどのような論考が寄せられていたのであろうか。創刊号の目次を次に見てみよう ―

光輝の燭臺

世界洞察と生の形成
智慧院年報
ヘルマン・カイザーリング伯爵編集
1919年

内容

アレクサンダー・フォン・グライヒェン＝ルスヴルム：来るべき人
ヘルマン・カイザーリング伯爵：変わり行く世界における我々の使命
レオポルト・フォン・ヴィーゼ：精神的統一体としてのヨーロッパ
ヤーコプ・フォン・ウエクッスキュール：国家としての有機体あるいは有機体としての国家

フリッツ・ヴィーヒェルト：転回
ヘルマン・ヘーフェレ：政治的カトリシズム
マックス・シェーラー：ドイツの二つの病
エルンスト・トレルチュ：ドイツ的教養
カール・ハウプトマン：魂よ！
フリードリヒ・ニーバーガル：魂の飛翔
ルードルフ・フォン・デリウス：魂の了解
アルトゥール・ボーヌス：物理学者
ハンス・ドリーシュ：哲学と実証科学
アルトゥール・リーベルト：現代と哲学[4)]

巻頭論文はルスブルムの「来るべき人」であり，新しい精神の形成がテーマとなっている。ヴォルフガング・ガイガーは最近の論文のなかで『光輝の燭臺』に興味深い批判的考察を加えており，「精神面での新しい使命」が智慧院で「中心的テーマ」となった理由として，「列強の政治的・軍事的抗争に敗れた」ドイツの歴史的事実を挙げている。ガイガーによれば，第一次世界大戦における敗北が，「新しいドイツ人の形成」というテーマを誘発しているのである。実際，創刊号の目次を見ると，「魂よ！」，「魂の飛翔」あるいは「魂の了解」といったドイツ人の心性の構造に深く働きかけようとする論考が掲載され，また同時に「ドイツの二つの病」のようにこれまでのドイツ精神の有りようにたいする批判的メッセージを含んだ論説も発表されているのである。[5)]

創刊号のテーマは広い範囲に及び，ヨーロッパ論や国家論，宗教や心理さ

4) Der Leuchter, [Bd.1], Darmstadt 1919.

5) Wolfgang Geiger, »Spärlich ist die Zahl der Meister«. Zur Buddha-Rezeption in Deutschland im ersten Drittel des 20. Jahrhunderts. in: minima sinica – Zeitschrift zum chinesischen Geist, herausgegeben von Wolfgang Kubin und Suizi Zhang-Kubin (Bonn), 2/1994, S. 71.

らに自然科学と哲学また実証科学を含んでいる。寄稿者も多様なジャンルにわたり，哲学者，歴史学者，社会学者，宗教学者，文献学者さらに文学者に及んでいる。こうした学際性をみるために，ここでは翌年の1920年に刊行された『光輝の燭臺』の目次も紹介しておこう —

光輝の燭臺

世界洞察と生の形成
智慧院年報
ヘルマン・カイザーリング伯爵編集
1920年

内容

ヘルマン・カイザーリング伯爵：問題の所在
ゲルハルト・フォン・ムーティウス：フマニテートと人間形成
ルードルフ・ビンディング：民族の倫理的基盤
ハインリヒ・ニーンカンプ：価値と作用
ヘルムート・フォン・ラウシェンプラート：ドイツ精神の歩み
フリードリヒ・ゴーガルテン：教会
レオポルト・ツィークラー：抵抗者としての佛陀（ブッド）
グスタフ・ハルトラウプ：秘教学批判
ヘルマン・ヘーフェレ：共産主義の理念と現実
フリッツ・ヴィーヒェルト：上昇軌道獲得論
ペーター・ベーレンス：芸術のエトスと場の転換
ギュンター・ヴァトブレヒト：価値と認識
ギュンター・ヴァトブレヒト：生の泉
アレクサンダー•フォン•グライヒェン＝ルスヴルム：鈴懸の木の下で[6]

DER LEUCHTER

WELTANSCHAUUNG UND
LEBENSGESTALTUNG

JAHRBUCH DER SCHULE DER WEISHEIT

HERAUSGEGEBEN VON

GRAF HERMANN KEYSERLING

JAHRBUCH 1919. GEBUNDEN 45 MARK

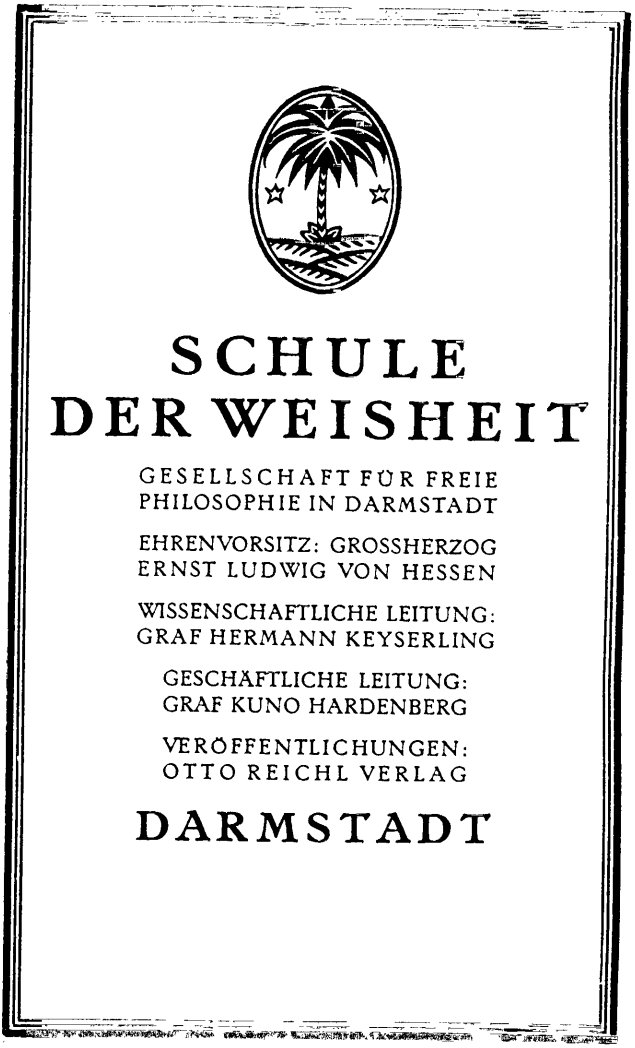
ALEXANDER VON GLEICHEN-RUSSWURM: Vom kommenden Menschen / HERMANN VON KEYSERLING: Unser Beruf in der veränderten Welt / LEOPOLD VON WIESE: Europa als geistige Einheit / JAKOB VON UEXKÜLL: Der Staat als Organismus / FRITZ WICHERT: Über die Umkehr / HERMAN HEFELE: Der politische Katholizismus / MAX SCHELER: Von zwei deutschen Krankheiten / ERNST TROELTSCH: Deutsche Bildung / CARL HAUPTMANN: Seele / FR. NIEBERGALL: Der Vormarsch der Seele / RUDOLF VON DELIUS: Das Verständnis der Seele / ARTUR BONUS: Der Physiker / HANS DRIESCH: Philosophie und positives Wissen / ARTUR LIEBERT: Unsere Zeit und die Philosophie

JAHRBUCH 1920. GEBUNDEN 90 MARK

GRAF HERMANN KEYSERLING: Worauf es ankommt / G. F. HARTLAUB: Kritik der Geheimwissenschaft / HEINRICH NIENKAMP: Werten u. Wirken / LEOPOLD ZIEGLER: Buddho der Protestant / HERMAN HEFELE: Die Idee des Kommunismus / GERHARD VON MUTIUS: Humanität und Bildung / FRITZ WICHERT: Die Gewinnung der Aufwärtslinie / GOGARTEN: Die Kirche / PETER BEHRENS: D. Ethos u. d. Umlagerung der künstlerischen Probleme / R. BINDING: Ethische Grundlagen eines Volkes / GÜNTHER WEITBRECHT: Wertung u. Erkenntnis / GÜNTH. WEITBRECHT: Der Brunnen des Lebens / A. V. GLEICHEN-RUSSWURM: Unter Platanen

OTTO REICHL VERLAG · DARMSTADT

資料1 『光輝の燭臺 — 世界洞察と生の形成 (Der Leuchter. Weltanschauung und Lebensgestaltung. Jahrbuch der Schule der Weisheit)』 第2号の中裏表紙に掲載された同誌第1号及び第2号の宣伝。右側には「自由哲學協會」が明示され，同協会の名誉会長ヘッセン大公エルンスト・ルート↗



↘ヴィヒ，及び学術責任顧問ヘルマン・カイザーリング伯爵，事務局責任者クーノ・ハルデンベルク伯爵の名前が記載されている。左側は『光輝の燭臺』第1号，第2号の掲載論文表題を列挙しており，本論文に全タイトルは訳出してある（35～37ページ参照）。

資料 2 『光輝の燭臺』第 2 号の中表紙。「燭臺」のモティーフについて，アレクサンダー・フォン・グライヒェン・ルスヴルムは著書『真の顔 － 社会主義思想の世界史』(Das wahre Gesicht. Weltgeschichte des sozialistischen Gedankens, Darmstadt 1919) のなかで次のように述べている ― 「過去は現在の顔を照らし出し，現在は過去の顔に光を投げかける。光輝の燭臺を手に取り，あらゆる時代の嵐にあっても消えることなきように燭臺を巧みに守り通すことが吾等の使命である。たとえ，弱々しい人間の手の中で炎が今にも消えそうに揺らめいていようとも，吾等は燭臺から手を離すことはない」。(S. 15)

上記の執筆者のなかで創刊号にも寄稿しているのはカイザーリング，ルスヴルムそしてヴィーヒェルトの三人のみであり，1920年刊行の智慧院年報には新しい寄稿者が集っている。創刊号を含めると延べ25名にのぼる執筆者を年報のために獲得しており，それは「智慧院」のネットワークの広がりを物語っていると言えるのではないだろうか。

執筆者の専門領域も多岐にわたっている。例えば20世紀の重要な芸術家の一人ペーター・ベーレンス（1868–1940）は，画家・園芸家・装丁アーチストの領域を自在に浮遊し，さらに「ベーレンス・イタリック」や「ベーレンス・アンティクワ」と言われる印刷文字なども考案した。ベーレンスを最も有名にしたのは，建築家あるいは工業デザイナーとしての活動であり，特に1907年から「AEG総合電力会社」の芸術デザイン主席顧問として照明器具・ボイラー・シーリングファンなどの日常生活に密接に関連する製品の美的センスを高めることに貢献した。さらに「AEG総合電力会社」の商標マークのデザインも担当し，イメージと経済の関わりという新しい領域で先駆的な仕事も展開した。こうした20世紀芸術の展開の可能性を具現していくベーレンスのような人物の思弁的論考が智慧院年報に掲載されていることは注目すべき事項である。

ヘルムート・フォン・ラウシェンプラート（1896–1982）は行政学と国民経済学を修め，1924年以後はヴァルケミューレにある「田園修育学舎（Landerziehungsheim）」において経国済民論の教諭として活動した。この「修育学舎」はナチスによって破壊されることになるが，ラウシェンプラートはフリッツ・エーベルハルトと名前を変えて抵抗運動に加わり，「国際社会主義者闘争連盟」の指導者となる。エーベルハルトは戦後バーデン・ヴュルテムベルク州議会のドイツ社会民主党議員に選出され，1949年からは南ドイツ放送局の総合局長に就任し，1961年以後はベルリン自由大学で出版・情報学の教授として教壇に立った。1920年の智慧院年報には，若きエーベル

6）Der Leuchter, [Bd.2], Darmstadt 1920.

ハルト（ラウシェンプラート）の「ドイツ精神の歩み」と題した興味深い論文が掲載されている。

グスタフ・フリードリヒ・ハルトラウプ（1884-1963）は「新即物主義（Neue Sachlichkeit)」という言葉を生み出し，それが1920年代の芸術・文化運動の一翼を担うスローガンとなっていく。ハルトラウプはマンハイム市美術館の館長になっているが，ハルトラウプの前任者は智慧院年報創刊号と第2号に寄稿しているフリッツ・ヴィーヒェルトであった。ヴィーヒェルトは国際的評価の高い作品を収集し，若い世代の芸術家をマンハイムに集め，市の援助によって若い世代を育成するシステムの開発に努めた。ハルトラウプはヴィーヒェルトの意志を継ぐとともに，同時代のアクチュアルな作品を美術館に収納することに尽力した。二人の試みは困難な財政状況のなかで展開されていくが，1933年ナチスが政権を取ったときに，ハルトラウプは解雇されることになる。智慧院年報2号には，ハルトラウプの「秘教学批判」を見ることができる。

最後にレオポルト・ツィークラー（1881-1958）を簡単に紹介しておこう。ツィークラーは1929年に第3回ゲーテ賞を受賞している。この賞の重要性は，受賞者リストにシュテファン・ゲオルゲ（1927年），アルベルト・シュバイツァー（1928年），ジークムント・フロイト（1930年），リカルダー・フーフ（1931年）さらにゲルハルト・ハウプトマン（1932年）などの名前が挙がっていることからも容易に推定できるであろう。ツィークラーは「ボーデン湖の賢者」と言われ，ギリシャ語で“methodos”に言われる「再学習」の方法論を提唱したことで知られている。ツィークラーによれば，人間の意識段階には，「魔術的」・「神秘的」・「社会的」・「哲学的」さらに「宗教的」段階がある。ツィークラーは，こうした忘れ去られた人間の原点に存在する意識段階へと「先導」（“methodos”とはドイツ語の „Wegweisung“，つまり「道を示す」ということ）していくプログラムを構想したのである。智慧院年報には，「抵抗者としての佛陀（ブッド）」というツィークラーの個性を端的に表している論考が掲載されている。

以上，智慧院年報の寄稿者のうち代表的な人物について簡単に紹介してきたが，こうしたスケッチから容易にみてとれるように，「内面の自由国家」を建設し，「魂喪失の状況」のなかで「人間としての品位と自由」を回復させようとするカイザーリングたちの強い意志が智慧院年報を貫いている。

2-2. 日常から脱却する具体的な訓練や営み

智慧院では1921年から24年のあいだ，精神力を深化させる実践的試みが定期的に組織された。それは初級者向き入門コースと，合同訓練及び特別修業から成るものであった。合同訓練と特別修業の初めと終わりには，カイザーリングが自己完成の方法について講演を行うことになっていた。この実践コースの具体的な指導に当ったのは，智慧院最初の専任教師エルヴィン・ルセルであった。智慧院の入門書として構想されたルッセルの著書『易経の神秘』[7] は，特別修業を理解する上で重要なものである。さらにオスカー・A. H. シュミツの『精神分析とヨガ』[8] とシャール・ボードゥアーンの『暗示と自己暗示』[9] もしばしば利用された。

入門コースは智慧院の構成員全員に開かれたものであった。入門コースで課される訓練は，内在する創造力を発露させるのに寄与し，生命にたいするスタンスを保持させ，精神を自ら制御する力を養うことを主たる目的としていた。つまり「集中・静止・瞑想」の三つの領域に及ぶ鍛錬であった。特別修業を受けられるのは，全員ではなく選ばれた人に限られていた。ルセルが個々のケースについて決定を下したのであるが，その基準は特別修業を受ける内面の準備がすべて整っているかという点と，さらに智慧院の全体にその

---

7) Erwin Rousselle: Das Mysterium der Wandlung. Der Weg zur Vollendung in den Weltregionen. Darmstadt 1923.

8) Oskar A.H. Schmitz: Psychoanalyse und Yoga, Darmstadt 1923.

9) Charles Baudoin: Suggestion und Autosuggestion. Psychologisch-pädgogische Untersuchung auf Grund der Erfolge der Neuen Schule von Nancy. Dresden 1923.

個人がどの程度貢献できるかという問題であった。つまり「智慧院は，心を癒す教会や病院のようなものではなく，次世代へ伝える能力を持つ者にのみ多くを与える施設であった」[10]。数日に及ぶ特別修業が終了する時期が近づくと，カイザーリングは「成し遂げた者」にたいして個人的に会話を交わし，助言を与える機会を設けた。

ルセルによれば，特別修業は体系的に行われるものであり，そのシステムは「内面の発展」を反映している。特別修業は日常から離れて，定められた規則に従って，教師の指導のもとで行われ，完成へと向かう「静止・瞑想」[11]に寄与するものであった。

ルセルは上記の著書のなかで，世界のすべての宗教にはそれぞれ独自の方法があるものの，同一のリズムを持つシステムを共有していると述べている。そのシステムとは簡略化して列挙すると次のようなものである —

①観照と観想（司祭者に見られる傾向）つまり静止
②行動と能動（武士に見られる傾向）つまり展開
③純化，光明，合体，変身

最後の項目③については，新プラトン主義とカトリックそして仏教において，「純化，光明，合体，変身」の4段階が原語でどのように表記されているのか紹介されている（但し学術的な精密度で疑義なしとは言えない）—

新プラトン主義	katharsis, ellamphis, ekstasis und enosis
カトリック	via purgativa, via illuminativa und via unitiva
仏教	Sittlichkeit, Meditation, Erkenntnis und Erlösung

ルセルによれば，祭りや年間行事には上記の三つの信仰領域のなかに類似

10） Hermann Keyserling: Der Weg zur Vollendung. Mitteilungen der Schule der Weisheit. Heft 3, 1922, S. 10.
11） Erwin Rousselle: A.a.O., S. 145.

の構造が認められるし，それぞれの宗教の創設者の生涯には似たようなプロセスが読み取れ，形態は多様であるが修業にも類似の構想や構造が認識できる。内容は異なっていても，完成へと向かう道筋と方法の点で，同じリズムや同じダイナミズムが存在すると言えるのである。[12)]

ルセルとカイザーリングによれば，聖杯（グラール）の場へと向かう「選ばれし騎士求道士」の姿は，西洋に生きる人々の内面世界と内的発展にとって，また特に智慧院修道者にとっては象徴的な意味を持つものである。つまり，騎士パルツィファルの途（みち）は，内面に向かう瞑想と外部世界への積極的アプローチという対立する力を統合するシンボルとなる。観照と観想の世界を具現する司祭者タイプおよび行動と能動を体現する武士タイプ，こうした途に向かう賢者の二つの有りようがこのパルツィファルの形姿のなかで一つとなっている―

「求道者パルツィファルは，途の半ばで沈黙という光の射さない森の中へ突然入り込むことになる。聖杯（グラール）の館はこうした深い森に取り巻かれているのである。パルツィファルは錯綜した表層の生の領域から抜け出て，現世を超越する核心の場を取り巻く自己の内面世界へと入って行く（内面への転換 Introversion）。こうした孤独と深い闇のなかをさ迷って，パルツィファルは明かりの差す湖の辺に辿りつき，そこで王者の聖杯（グラール）に出会うことになる。聖杯（グラール）はパルツィファルに歩むべき途を示すのである。聖杯（グラール）によって使命を授かることによって，パルツィファルは上昇へと向かい，分かれ道で，右方向で高みへと連なる途を選ぶことになる（覚醒 Erweckung）。高みに到達すると，パルツィファルは清めの浴を取り，これまでの衣を身から取り払う（禊の完成 Purgation）。光明はクライマックスに達することになるが，それは聖杯（グラール）を観照し，本来の生の意味を獲得するときである。自我を委ね献身の域に入ることによって，合体

12）Erwin Rousselle: A.a.O., S. 149 を参照。

が実現する。天空から射す一筋の星の光が聖杯(グラール)に当り，炎の文字となってパルツィファルの名が浮き出てくる。こうしてパルツィファルの名は存在の恒久的意味の象徴となる。パルツィファルは聖杯(グラール)を司る王としての地位を与えられ，司祭であると同時に騎士でもある身となり，その身に新しい衣を纏う。この衣こそ今や浄化された自我（解脱 Extraversion）である。それは救済者パルツィファルにとっての救済を意味する」[13]。

「パルツィファルの形姿」のなかに具現されている「内面への転換」，「覚醒」，「禊の完成」そして「解脱」へと向かうプロセスは「完成」への理想的道筋であるが，こうした道筋の一端に入るべく「日常から脱却する具体的な訓練や営み」が，智慧院で体系的に構想され実践されていたのである。

2-3. 親密な子弟関係の構築

智慧院では「同学の士（persönliche Schülerschaft）」という概念が独自の意味合いを有している。智慧院の院長，つまりカイザーリング自身，自分が創立した機関の「学びの徒」であると述べているのである。「同学の士」という言葉はまず，協力し合う仲間意識を高め，共同体の発展を共に促進する意欲を表している。智慧院の中には独自の生活リズムやスタイルが存在しており，それは濃密に集約して智慧院の雰囲気を形成し，こうした圏域に入ることによって人間としての存在の水準を高めることが目指されたのである。共同体の意識は，そうした独自の生活リズムやスタイルを生きるなかで生まれてくることになる。智慧院の学びを他者に伝達するための基本となる前提は，「同学の士」としての適切な身の構えを絶えず維持する点にある。その前提とは具体的には，存在あるいは根源的意味の地平に向かって自らを相応に開示することであり，また特殊な有りようを示しているどのような者にた

13) Erwin Rousselle: A.a.O., S. 148.

いしても全人格を尊重する気持ちを持ちつづけることであった。さらに想念と表出の一体的相互関係を保持しその雰囲気を絶えず醸し出すことも，智慧院の学びを他者に伝達する基本前提の一つであった。

言葉による争い，論争あるいは特定の立場を独善的に主張すること，これらは「非-智慧」とみなされた。人種や党派的争いあるいは信仰上の争いは無意味である。なぜなら，それぞれの意見の個別的内容や学習内容は問題ではなく，根源的意味へと向かう洞察の姿勢が最も重要であり，それは意見の二元的対立の彼岸に存在するのである。

賢者は特定の立場を代表して主張することはない。賢者は存在することによって，必要に応じて意見を具現化・顕現化するのである。智慧院に学ぶ者が拠り所にしている理念は，完成への途上に常にあるという認識に基づいている —「智慧院に学ぶ者は途上にあって常に努めている修業者としてお互いを認めているのである。すでに到達された水準に捕らわれることはない。このようにリズムの運動性は外部から阻害されることなく波紋のように伝えられて行くのである。」[14] こうした洗練された特別な雰囲気こそが，智慧院の運動にみられる広がりの前提となっている。智慧院を構成する「同学の士」は，学校教育のような方法で訓育・形成されるのではなく，シンポジウムや修業のための集まり，さらに関連する書物の読解などによっていわば霊感のように理念を内面化し，自らの存在そのものとしていくのである。

完成への途上にある修業者としての精神的絆という共同体意識を基盤としながら，さらに一人の「学びの徒」として個人でさらに高いレベルを要請することも可能であった。つまり，カイザーリングと個人的な会話を持つことや，生きる上での助言を受けること，また時にはカイザーリングと私的なレベルで接触をもつこと，具体的にはカイザーリングと同じ屋根のもとで生活を共にすることなどを智慧院の構成員は自分で求めることができた。しかし

14) Hermann Keyserling: Der Weg zur Vollendung. Mitteilungen der Schule der Weisheit. Heft 1, 1920, S. 12.

こうした親密度の濃い師弟関係は，量的にみて制限を設けざるを得ず，常に高い質が求められていくことになる。集約的で親密な触れ合いにたいする要請が出されると，ルセルとカイザーリングは一つ一つの要望を厳密に吟味した。濃密な関係に入るには，特別な知識とか資格などは不要であった。言葉を交わしたり書簡などで知ることのできる内面のスタンスや心的動機，そうしたもののみが重要であった。自分自身に高度な集中性と濃密性を課し，存在の内から自らの有りようを完成へともたらそうと一点の疑念なく真の心を持って純粋に努めている「学びの徒」，このような修業者にのみ個的な親密な関係に入ることは許された。「学びの徒」が学ぶべきは，任意の現在ある有りようをより深い存在へと引き戻し，そうした存在と自分を関連付けることにある。

カイザーリングは「学びの徒」を触発し導く方法を，病を癒す医術と比較しながら，それは一人一人にたいして個別に施され，しかもそれぞれに応じた処方でなければならないと述べている。教祖を崇拝するような追随的な師弟関係ではなく，「学びの徒」は自らの途を修めるべく成熟の度合いを次第に強め完成へと向かうことが求められているのである。カイザーリングは次のように述べている —「学徒に示されるのは，一つの決まった道でもないし，ましてや私の道でもない。完成へと向かう学徒一人一人に，自分の道が存在するのである。それが可能な限り示されねばならない。自分が想像以上に自律できる能力を有していること，自由というものをこれまで以上に体得し得ることが自然のうちに学ばれねばならない。私の弟子となる人は，普通の意味で弟子になるのではなく，— 私としては次のような言葉を使うのはもともと好むところではないが — 完成の圏域そのものへの途を歩み続ける同じ巡礼の同朋なのである」[15]。

カイザーリングにとって，教祖的な指導者のような存在ほど程遠いものはなかった。指導者が弟子に代わっていろいろな決断を下したり責任を取るよ

15） Hermann Keyserling: A.a.O., S. 17f.

うな素振りを見せたり，あるいは命令のようなものを授けることは，親密な師弟関係の共同体のなかで行われることはあり得ないことであった。しかし自分の存在全体を委ねた形態での共同的作業や，師と弟子の関係の両極性を保ちながら師にたいする関わりをバランスよく調整する能力，そうしたものが自己完成への途を歩む速度を速め，自己内面領域への「入坑」のプロセスを導き，真の洞察力を生むのである。こうした点からみても，弟子がダルムシュタットに滞在できる期間は2週間に限定されていた —「高度な集中を持続し，まったき受容の能力を維持できるのは，これ以上の期間はまず不可能である」[16]。

「同学の士」としてこうした親密な交際を終えたあと，「学びの徒」は自分たちなりの具体的な行動を通して世間で個として自分の道（方法）を表出し，完成への途上における現在の存在水準を展開してみせるのである。ある一定の新しい水準に達すると，親密な共同体を新たに訪れ，カイザーリングと言葉を交えたり，シンポジウムなどの智慧院の催し物に参加することによって，完成へと向かってさらに途を歩みつづける可能性が開かれていく。

3. まとめ

以上，本論[17]では「制約なき知恵」を実現する施設として構築された「智慧院」の理念と実践について概略を説明してきた。シンポジウムや叢書『完成への道程』及び「智慧院」の最も重要なメディアであった『光輝の燭臺』について，それぞれの具体的な実践の形態や構成に論及することによって，

16）Hermann Keyserling: A.a.O., S. 19.

17）本論の作成にあたっては，カイザーリング研究家として知られるUte Gahlingsの成果を十分に活用した（Ute Gahlings: Sinn und Ursprung. Untersuchungen zum philosophischen Weg Hermann Graf Keyserlings. 1992, Sankt Augustin)。筆者は1999年ダルムシュタト市の「ヘッセン州立古文書館」に同女史を訪ね，以来研究上で様々な助言と協力を得ている。本論はこうした女史との交流なくしては生まれなかったものであり，この場をかりて同女史に感謝の意を表したい。

カイザーリングの活動の中枢部分に光を当てようと試みた。さらに「日常から脱却する具体的な訓練や営み」と「親密な子弟関係の構築」という視点から，「完成の圏域」への道を求める「智慧院」の具体的実践の特性についても詳細な記述に努めた。

個々の項目について補完すべきところは多々残っているものの，「智慧院」の存在についてまず想起してもらうという本論の意図は果たし得たものと考えたい。「智慧院」はヨーロッパの伝統的認識にたいするカイザーリングの根本的懐疑に源があり，あたらしい文明史的知の構築という夢に支えられた挑戦であった。それはまさに東と西の知的融合の実験場というにふさわしい空間を提供したのである。政治的・社会的混迷が増して行く時代のなかで「智慧院」の活動がどのような困難な局面に行き当たっていくことになるのか，またこの知的実験がそうした困難を克服し得たのかは，さらに研究されるべきテーマであろう。東と西の知の交流については現在に至るまでさまざまに議論されてきているが，双方の差異性を十分に認識しながら，文明史的な共通の構造を取り出そうとする「智慧院」の試みは，今日もう一度読み返されるに値いするものとは言えないであろうか。